

団体名	NPO法人 鎌倉あそび基地	活動タイトル	幸福度をあげる校内居場所づくり・地域と学校パートナーシップ事業		
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）					
●地域の望ましい社会状況(ビジョン)	当団体の実現したいビジョンは「子どもが自分の居場所や学びの場を選択できる社会の実現」である。具体的には、学校内外に子どもが無償で過ごすことのできる居場所がいくつもあり、ひとり一人の子どもに合った居場所や学びを選択することを当たり前のこととして受けとめ、地域全体で子どもを温かく見守り、育していく社会。すなわち「不登校」という概念のない社会の実現を目指す。				
●団体の社会的役割(ミッション)	団体のミッションは「子どもが真ん中の居場所づくり」である。具体的な取り組みは以下のとおり。 ①フリースクールLargo：不登校の子どもと家族の居場所及び子どもひとり一人に合った多様な学びを提供 ②「キミイロ」：神奈川県教育委員会と協働で不登校情報ポータルサイトを運営 ③学童保育ふかふか：放課後児童健全育成事業補助金にて民間学童保育事業を運営				
●団体の活動基盤	<ul style="list-style-type: none"> ●望ましい人材の資源：①不登校の子どもたちの特性を理解し、必要な時に情報やアドバイスを提供し、時には子どもの代弁者となる人材 ②広報やファンドレイジングのサポートをできる人材 ③WEBサイト運営をサポートできる人材、情報収集や取材をできる人材。 ●望ましい物的資源：団体施設の近隣で居場所事業実施のための専用施設を建築する土地の提供。 ●望ましい活動資金：施設の建築費用や当団体とは別の角度での広報が得意な団体に委託する費用など、使途が限定されていないまとまった資金を確保し、必要なタイミングで資金投下できる財政力を保持していること。 ●望ましい情報：団体運営に必要な人材を確保し、育成していくために必要な研修内容の整備を、専門家などアドバイザーの協力を得て実施。育成研修⇒実践⇒習熟⇒メンターとして人材育成研修サポートという形が確立されていくこと。 	<p>深沢中・教員研修の様子 (6/25)</p> <p>くじ引きで決めたグループごとに事例検討。自分がどんな子どもだったかを紹介してからスタート。</p> 			
■活動報告		■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)			
<p>鎌倉市教育委員会が実施する、公立小中学校における教室になじめない子どもを対象とした校内フリースペース（以下FS）事業において、学校の状況に応じた伴走支援を実施。2校を対象とした。</p> <p>(1)研修プログラム構築→地域から採用されたFSスタッフ「まなびのサポーター（以降まなサボ）」対象の、連絡協議会における研修内容の構築と実施。</p> <p>(2)学校関係者・保護者への研修実施→教員対象の不登校についての研修を2回実施。（内容：①不登校全般について ②2つのケースを当団体のスタッフも交えてグループディスカッション）</p> <p>(3)まなサボへの研修→研修は教員研修に共に参加。学校の希望を受けて月一回程度のFS巡回支援を実施。変化するFSの子どもの状況を共有し対応をアドバイス。</p> <p>(4)活動基盤の強化→①新規スタッフ向けの研修を現職スタッフひとり一人が担当し、伝えることを通じて自身の成長に繋げた。</p> <p>②本事業継続のために企業寄付を募るために資料作成。</p> <p>③不登校の原因の一つに生活困窮があげられることから、フリースクールLargoの奨学金制度創設のためのクラウドファンディングを実施。</p>		<p>(1)研修プログラムの構築→不登校親子の心情への寄り添い方や事例紹介、県域での取り組み紹介等、当団体の提案通り実施できた。</p> <p>(2)学校関係者・保護者への研修実施→「不登校の子どもの思いを初めて知った」「他の先生方の考え方を知れてよかったです」「学校と外部の連携を、相談先が増えたと考えられるようになった」等のアンケート回答があった。保護者への研修は叶わず。</p> <p>(3)FS巡回支援→FSは当初、教室復帰のための場として笑い声が外に聞こえるのも憚られる状況だったが、子どものありのままを受け入れ、安心できる場の提供をまなサボと共にすすめたところ、数名が教室に戻り、他数名も時間割通りに登下校するなどの変化が見られた。「子どものサボり」を警戒していた教員の心境が徐々に変化。職員室は「まずはFSを活用して学校に来ていることを喜ぶ」という雰囲気になってきているとのこと。校長が校長会にて成果を発表してくださったことから、次年度はさらに5校が支援を希望。一年で大きな成果があった。</p> <p>(4)活動基盤の強化→①研修を受けたスタッフからのフィードバックがやりがい再認識につながった。②企業の価値観を知り、客観的な見せ方を研究できた。③生活保護世帯の子ども2名分以上のフリースクール奨学金を獲得、目標を達成した。</p>		<p>深沢中・教員研修の様子 (1/22)</p> <p>不登校についての様々な情報やフリースクールでの子どもの様子を紹介。学校としてできることを考える機会となった。</p> 	
■事業を通じて得られたノウハウ		■望ましい社会状況を達成するための課題			
<p>1. 信頼に基づく「学校内課題の可視化」ノウハウ</p> <p>学校教員が抱える「公には出しづらい困り感」（例：「甘え」か「困り感」）の判断の難しさ、連絡を拒否する家庭への対応の限界）は、従来の会議や研修では共有されにくい。</p> <p>教員へのアンケートやフリースクールの実験に基づいたアセスメントの知見や、不登校の子どもと親の具体的な声を対話に持ち込むことで、教員が抱える「困り感」が、専門的な知識と支援観の不足から生じていることを浮き彫りにし、具体的な解決策を導入する土壤を作った。</p> <p>2. 「多様な成功体験の提示」による意識変革ノウハウ</p> <p>不登校支援における成功モデルは「復学」という固定観念を打破し、支援の多様性を示した。</p> <p>○成人した不登校経験者のメッセージの共有で、教員に子どもの心の理解を促し、「子どもの最善の利益」を長期的なキャリア形成の視点から捉え直すきっかけを提供。</p> <p>○卒業生を送る会に校長を招待するなど、教員に子どものベースに寄り添った居場所で子どもたちが自己肯定感と主体性を回復し、元気になっていく成功の過程を視覚的・体感的に共有し、学校外支援の価値を強く納得させる効果。</p> <p>○不登校ポータルサイト「キミイロ」での取材を通じて、管理職（校長）レベルから学校外支援の必要性や効果を認知させ、校長会での事例発表に繋げたことで、多機関連携をトップダウンで促す体制を確立した。これらのノウハウは、フリースクールが学校教育の在り方と教員の支援観を内側から変革するために有効に機能できることを示したといえる。</p>		<p>1. 行政・連携</p> <p>○学校や教員が外部支援の価値を理解しづらい構造がある。本事業を、市教委の委託事業として市内全校への継続を提案し、学校内での子どもも主体の居場所づくりを通じて学校教育の在り方と教員の支援観を内側から変革する必要があることを訴える。また、教員が外部と交流し価値観を更新できるよう、校内カフェのような交流しやすい仕組みづくりや、居場所提供事業者のネットワーク形成を実現していく。</p> <p>○不登校支援が学校や教育委員会内の生徒指導や教育センターに閉じられ、福祉・医療・地域資源との連携が不足しているため、複雑化した課題（貧困、虐待、発達特性など）に対応しきれていない。学校と地域の連携の必要性を改めて行政に認識させ、当団体がハブとなって地域の福祉系団体・医療・との連携強化を推進する。</p> <p>2. 社会啓発</p> <p>不登校を「個人的な問題」や「怠け」と捉える社会的な偏見が今だ根強く、支援を求めづらい状況が続いている。「キミイロ」を活用した学校内の情報提供イベントや不登校相談会の開催や、地域のイベント参加において、不登校の多様な実態と、それを支える地域社会の必要性について周知し、意識啓発を広げていく。</p>		■活動成果のアピールポイント（自由記入）	
		<p>この1年間の活動を通じて</p> <p>学校や教育委員会が、地域のフリースクールとの連携の有効性を認め、信頼関係を構築すること</p> <p>を達成しました。</p>			
■受益者の具体的な変化（自由記入）					
<p>校内フリースペースでのびのびと過ごした子どもたちが元気になって教室復帰したことがきっかけとなり、「不登校は甘え」という根強い偏見のあった先生方の意識が、「どんな形であれ（勉強しないとしても）子どもが学校にきて過ごしていることをまずは喜ぶ」という意識に変わった。これにより子どもや保護者は、安心して校内フリースペースの利用希望を先生に伝えられるようになり、学校と保護者の信頼関係も構築されつつある。</p>					